

キラリ☆ 中野のチカラ

小林 憲生さん 【小田中】



青年海外協力隊として 途上国の発展に貢献したい

途上国など、世界の国々と共に問題の解決に取り組んでいる独立行政法人 国際協力機構（略称・JICA）の青年海外協力隊として、3月28日から2年間、マダガスカルにボランティア派遣される小林憲生さん。3月17日には市役所を訪れ、活動内容や抱負をお話いただきました。今回は、熱意を持ってマダガスカルを舞台に問題解決に取り組む小林さんにお話を聞きました。

○隊員を目指したきっかけ

小学生のころ、校長先生が海外から来られた方と英語で話をしていた、とてもカッコいいと思ったことから海外に興味を持つようになりました。大学でも国際コミュニケーション学を学んでいましたが、はつきりとした将来の目標を見つけられずいました。そんな時に、先生から「海外に興味があるなら、まずは協力隊に行ってみる」と言われ、講義の中で、「今、君たちが学んでいる技術を生かせば、途上国で困っている人を何千何万と助けることができる。これはやりがいのある仕事だと思わないか？」という話をしていただきました。自分にも何かできることがあるはずだと思い、JICAの隊員として途上国や社会で活動したいと思うようになりました。

○現地での活動内容

マダガスカルでの私の活動職種は、「コミュニティ開発」という職種です。現地の方と共に考え、共に行動を起こしていくという内容で、ヒントを得ながら現地の方と加工品販売など「新しい何か」を作り上げることを目標にしています。

派遣先は山の中腹にあり、中野市のように、おいしい果物やお米がとれる地域だと聞いています。

行ってみないと分からないことも多く心配なこともあります。現地の方の生活収入向上を目指すとともに、現地の皆さんに日本の文化も紹介し、いつか日本に行きたいと思っていただけよう頑張りたいです。

○市民の皆さんへ

青年海外協力隊から戻ってきた際に、中野市の子どもたちに自分が学んだ世界を伝え、「こんな世界があるんだ」ということを知ってもらいたいと考えています。

先の話なので、まだどんなことができるのか分かりませんが、私が生まれ育った中野市なので、地域に私の経験を還元し、子どもたちの視野を広げるとともに、世界に羽ばたききっかけとなれば嬉しいです。

皆さんに良い報告ができるよう、この活動を通して自分自身の成長にもつなげ、日本だけでなく、中野市の代表として頑張ってきます。

広報クイズ

■今月のプレゼント

「信州ナカノキノ」SWEETS

詰め合わせ」…2人

問題

信州ナカノキノ「SWEETS」の
販売店舗数は？ 「●店舗」

クイズの答え、住所、氏名、年齢、電話番号、世帯主名を記入の上、今月の広報で参考になった記事、今後知りたい情報などはがきに書いて、次の宛先までご応募ください。

締め切り 4月25日(月)必着

※当選はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

先月号の答え 市内の3つの学校給食センターでは1日に合計何食の調理が可能？ 答え・・・「5000食」

383-8614

（住所記載不要）

中野市庶務課
秘書広報係 行

住所・氏名・年齢・
電話番号・世帯主

市民リレー元気の輪

No.20

神田 連さん
からのご紹介



○自己紹介

実家から約300坪の家に嫁ぎ、当時は、夫と一緒にリンゴ、モモ、ナシ、干し柿などいろいろとやり、450頭の豚を飼ったこともありました。その後、ふんの臭いの問題で養豚をやめ、家じゅうの畑がブドウに変わり、それも8月から11月まで毎日夜なべをするのは、体力的にも精神的にも厳しいということになりました。

そして、子どもと一緒に仕事をするにはキノコが一番よいのではということ、ブナシメジ栽培を12年間やり、それも値段が安くなつてしまった頃に大きな会社に身売りして、そこで70歳まで働かせてもらいました。今は、農業用機械も持た

ず、負担の少ないブルッコリーを作っています。

また、十数年前から家族で月に1回朝早く車で出掛けて、旅先の日帰り温泉に入り、夕方家に帰ってくる「一日ドライブ」を楽しみに続けています。遠方では、姫路城や輪島まで行ったことも良い思い出です。



▲高社山の裾野の畑にて

○元気の秘訣

夫婦仲良くどんなことでも二人で話し合って、ゆとりを持って生活していることでしょうか。

また、趣味で、コーラスとマレットゴルフに月に1回ずつ通っています。仲間と歌ったり、体を動かしたりすると気持ちがあつつきりするので、毎月とても楽しみにしています。

○おらほの自慢

越の集落は高社山の南斜面で日当たりも景色も良く、おいしい果樹が育ちます。近年はシャインマスカットが人気を呼び、若い農業後継者たちが希望と自信を持って地域を守ってくれており、活気があつてとても素晴らしいと思います。

池田市長のわくわくレポート

vol. 31



中野市まち・ひと・しごと創生総合戦略

まち・ひと・しごと創生総合戦略、いわゆる「地方創生」の展開がいよいよ本格的に開始される。全国津々浦々、知恵を絞り、地域特性を活かした様々な取り組みが展開される。地方創生の取り組みの特徴は、地域の資源を発掘し、活用し、新たな「まち、ひと、しごと」を創出するなかで、人口減少下にあつても、活力を失わない地域づくりを目指すということであろうか。

市長として、ビジョンや計画は「脳作業」である程度形が作れるが、具体的に進めるに当たっては、その手順や段取り、そして関係者との調整など、「ひと」の確保が要となる。知恵も知識も「ひと」に帰属する。

地方創生では、ある種プロジェクトの自立的継続性を求めている。起動は支援するが、持続的な展開を求めている。そうした場合、計画立案から実行、マネジメントまで、しっかりととした中心となり推進管理する「ひと」が今一番必要となつてきている。「ひと」とは個人でもあるし、団体でもある。今、まさにそうした

点からすると、公民連携、官民協働といった取り組みの時代がやってきたといえよう。

今月号の特集で取り上げているが、中野市まち・ひと・しごと創生総合戦略の具体的施策に掲げる「中野市まるごと6次産業化」事業の一つとして、先般、中野市特産のキノコを使ったスイーツを開発し、地域外に発信する事業が市内の事業者の皆さんの協力を得て、様々開始された。また、中野市産のリンゴを使ったスイーツを開発し、その発表会が東京で開催された。この他にも、中野市を売り込もうとSNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）を使って情報発信を始めていただいている。一人一人が主体的に行動を起し、やがてそれぞれがネットワークする大きな力になる。こうしたうねりが多々起きることを期待したい。

地方創生は今始まったばかりだ。しかし一方で長期的な視野に立つて、まちづくり、教育、福祉政策も進めなければいけない。「中野市は本当に良いところだ」と、市民の皆さんに思っていただけのように、エンジン全開で市政に邁進したいと思う。

わたなべ まさこ 渡辺 正子 さん (越)